

---

# 秒針の詩達

P A T R I O T

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

秒針の詩達

### 【Nコード】

N1483L

### 【作者名】

PATRIOT

### 【あらすじ】

コブクロの歌が織り成す、物語達。

コブクロの曲を原作に作られた物語の短編集です。

## 君という名の翼（前書き）

この物語は、君という名の翼の歌詞で作られた物語です。

歌詞などが所々にちりばめているはず。分かるかも。

この物語が終わった後は、ぜひ君という名の翼を聞いてみてください。

## 君という名の翼

賢治はバスを降りると、田園風景を横目に歩き出した。久しぶりに故郷に帰ってきたが、過疎化が進む一方で、一向に町が発展していないのが分かった。数十年前と同じ風景、山の形、人通りの少ない道。そしてなにより、自分。

賢治の心の一部は高校時代から発展しないままだった。四十歳が近い今でも、あの頃の記憶が引つかかっている。おじさんになつたわね。妻にはいつもそう言われる。確かに賢治の風貌はもう、日本にありふれた、ただのおじさんだった。落ち窪んで細い目、くたびれたような表情、メタボリツク予備軍の腹、白髪。

会社でまじめ賢治だが、部長に「有給を下さい」と言った時には、驚かれた。何せ賢治は勤勉で、十数年という勤務期間の中で、無遅刻無欠席の記録を持っていた。驚かれるのも、無理はないだろう。しかし、部長はためらいなくOKを出した。たまには休ませないと、過労死してしまう。そう思ったのだ。

有給をとつてまで、賢治には取り除かなければいけないものがあった。

賢治はしわくちゃの写真を握り締めると、夕日の落ちる空を見ながら走り出した。スピードが遅く、体は重そうだが、フォームは綺麗だ。その姿からは、あの輝かしい時代が連想させられた。

賢治は陸上部のエースだった。現在のあの容姿からは想像もつかないが、『期待の新星』として有名だった。その実力から将来も見込まれていたほどだ。現在もその記録の一部は残っており、その記録を超えた者はいない。

そんな賢治には、中のよい幼馴染がいた。自分と同じ歳の女の子で、『由香』という名前だった。家が隣同時で、いつも遊びに行っ

ていた。さすがに中学生になるとそれも減ったが、それでも登下校を共にするほど仲が良かった。周囲の人間からは関係を怪しまれていたが、そういった関係ではない。幼い頃から一緒にいるのか、そういった感情が湧いてこないのだ。強いて言えばパートナー 互いを支えあう関係だった。

二人は同じ高校に通うことになり、同じ陸上部に入るようになった。賢治は短距離の選手で、由香は長距離の選手だった。種目はそれぞれ違うが、二人はお互いにアドバイスしあいながら、成長していった。

もう日は沈んで暗くなっていたが、懐かしの母校からは光が見えた。よく目をこらすと、野球部が練習している。賢治は汗だくになった体を冷やすために、立ち止まった。歳にしてよく走ったほうだ。久しぶりに、いい運動になった。

ゆっくり歩きながら、懐かしの母校との距離を縮めていくと、グラウンドの全体が一望できた。賢治が学生時代のころは、こんなに暗くなくても部活をしていたものだが、今確認できるのは野球部だけだ。陸上部の姿はなかった。 somewhere、グラウンドにトラックが存在していなかった。

賢治はよく見るために、グラウンドと道路を隔てているフェンスに張り付いた。やっぱり、トラックは確認できない。

「ねえ・・・君・・・」

ボールを拾いにやってきた野球部員に、賢治は声をかけた。野球部員は一瞬驚き、あどすさりした。しかし、すぐに表情を変え、明るい顔で答えた。

「なんですか？」

「陸上部は・・・練習していないのかい？」

野球部員は首をかしげた。

「陸上部？そんなのありませんよ。・・・確か、数年前に廃部になったとか」

「は・・・廃部？」

昔は人気があつて、部員の数が全校で一番多かったのは陸上部だった。しかし、時代は変わってしまったようだ。

「今は季節部になっていきます。全校で速い人だけが集められて、大会に出るんです。まあ、それでも本気を出している人は少ないですよ。熱いし、キツイし、かつたるいし」

野球部員に賢治がお礼を言つと、野球部員はすぐにノックに加わつていった。そんな野球部員の姿を見ながら、賢治は遠目で記憶のシアターを見ていた。

三年生の最後の大会。賢治はスパイクの紐を結びながら、深呼吸をしていた。やはり、最後の大会となると緊張する。しかし、大丈夫だ。まだ地方大会なんだから。さほど力を抜いても、県の大会には出れる。

靴紐を結び終わると、賢治は顔を上げ、観覧席からグラウンドを見た。地方の競技場だが、やはり爽快感はするものだ。競技場の所々では、人々がウォーミングアップのために運動している。フェンスには応援団幕が張られ、それぞれの学校を表す四字熟語が風にたなびいている。

不意に、味わつたことのない感触が賢治の左頬を襲つた。賢治は驚いて飛び退くと、頬を押さえながら正面を見た。

由香がいた。由香は冷えたスポーツドリンクの入つたペットボトルを片手に、満足げな笑みを浮かべている。

「はい。がんばつてね」

由香が投げたペットボトルをキャッチすると、賢治は微笑んで見せた。

「ありがとよ。でも、お前も走るんだぞ？4000m。今のうちにウォーミングアップしとけよ」

賢治がそういうと、美香は遠めで競技場を見た。丸くて小さな目が揺れ動く。

「わたしは・・・賢治みたいにすぐくない」

「大丈夫だよ。絶対、一緒に県行こうぜ」

賢治はそう言うと、ペットボトルを由香の頬にあてた。由香は驚きはしなかったが、嬉しそうな表情を浮かべている。

由香がジャージのポケットをまさぐり始めた。まだ新しいジャージらしく、綺麗な赤色が賢治の目を刺激する。

「そうだ・・・これ・・・」

由香がポケットから取り出したのは、お守りだった。賢治が走っている姿がぬいぐるみになっている。お手製なのか、ところどころの糸がほつれていたが、そこはご愛嬌だ。由香は以外にも不器用なのだ。ハッキリいって、裁縫は賢治のほうが上手い。

「ああ・・・お互いがんばろうぜ」

由香はうなずくと、賢治に手を振って走り去っていった。賢治はそんな由香の後姿を見ながら、お守りを握り締めた。

賢治は時計を見た。競技開始まで、一時間をきっている。賢治の出る1000mは、由香の出る4000mより先にある。

賢治はトラックに出ると、軽く跳躍をしながら、ウォーミングアップを始めた。

一球のボールがフェンスに当たった。賢治は驚いて目をしばたかせ、現実に引き戻された。

なぜだろう。思い出が湧き水のごとく、流れ出てくる。思い出したくないのに、この記憶にいつも振り回されてきたのに。大学入試の時も、入社面接の時も、結婚する時も。

そうだ。この記憶をスッキリさせるために、賢治はわざわざ有給をとったのだ。スッキリさせられる、という根拠はない。でも、なにもしないよりはましだった。あの時自分が、あきれ程真っ直ぐに走っていた時間。そんな時間を、取り戻したいだけかもしれない。

賢治はまた、走り出した。行き先もなく、無心に。

スタートの合図が、ピストルによってされた。トラック上にいた六人の選手達の足の筋肉がいつきに浮き上がり、次の瞬間には100m先を目指して飛び出していた。賢治は体いっぱい風を受けた。賢治の走るスピードはグングン上がっていき、すぐに先頭に来た。そして尚も、賢治のスピードは上がり続けた。聞こえる歓声、声援、野次。賢治はその全てを感じ取った。

そして、由香と目が合った。

賢治は気が付くとゴールしていた。余裕のゴール。類稀な才能を持つ賢治には、難しいことではなかった。

スポーツタオルを持った由香が、駆け寄ってきた。その表情は満面の笑みを浮かべている。

「はい、お疲れ様」

賢治はスポーツタオルを受け取ると、首元の汗を拭った。

「由香も、がんばってくれよ」

由香は無言のままうなずいた。そして、賢治に背を向けた。

「がんばってみる」

由香の声が、賢治の心に響いた。不安なのだろうか、声が安定していない。無駄なプレッシャーをかけてしまっただろうか？

賢治はタオルを肩にかけると、準備体操をする由香の背中を見つめた。小柄な体だ。あれで4000mを走るとは想像できない。ほとんどの選手が日焼けした真っ黒な肌に、長い足という体格なのに、由香だけは真っ白な肌に小さな体だった。中学校時代も、そんなに体力があるわけでもなかった。

しかし、由香も努力はしてきた。雨天の中も走り、何回風邪を引いたか分からない。

「選手、スタート位置に集合してください」

賢治はスポーツドリンクを口に含むと、フタを閉めながら由香を。由香は緊張しているようだ。顔はいつもと違って強張っている。

由香と目が合った。賢治は親指を突き出すと、笑いかけた。由香も笑い返すと、手を振ってきた。賢治も手を振り返し、ガッツポーズした。

由香がスタートラインに立った。体が小さいのが、もっと目立って見えた。

走者は15人。その中で三番以内に入らないと、県の大会には行けない。

「位置について・・・よい・・・」

ドンツ、つとピストルの音が鳴った。15人の走者が走り出し、場内が一気に盛り上がる。

「がんばってくれ・・・」

賢治は思わずそう呟いていた。なぜだろう。胸が苦しい。

由香は先頭集団に混じって走っていた。先頭集団の最後の方ではあるが、よくついていっている。やはり、努力は実るものだ。

場内の歓声が頂点に達した。一人一人の選手に各校の生徒が呼びかけ、応援歌が合唱される。各校によって応援歌は違うため、最終的にはただの叫び合いになっていく。賢治もその叫び合いに参加していた。ひたすら由香に叫び続ける。

由香の表情は苦しそうだ。

3000m地点。残り1000m。先頭集団はさらにペースを上げた。由香も負けじとペースを上げる。苦悶の表情がより一層、深まった。

「あと1000mだ！がんばれ！」

賢治は思わず叫んでいた。場内の歓声は未だ鳴り止まず、生徒達は興奮している。このあとに男子の4000mがあるのにも関わらず。

残り500m。由香は先頭集団から突き放された。必死の応援も叶わなかったのか。賢治は叫ぼうと息を吸った。由香から貰ったお守りを力いっぱい握りしめる。

すると、由香がペースを速め、先頭集団に入り込んだ。由香は尚

も、ペースを上げる。ものすごい追い上げだ。先頭集団の先頭へのめり込みつつある。

自分と由香の所属する陸上部が盛り上がり始めた。場内で一番声援が大きくなった。

残り100m。由香の表情が晴れやかになった。

勝てる。賢治はそうつぶやくと、由香の名を叫んだ。

由香が先頭に来た。別の学校の生徒が落胆の声を上げ、我が校の声援は最大限に達した。全員が喉を枯らし、雑音とも聞こえる音を発する。

残り50m。尚も由香のペースが上がり続ける。由香、よくがんばった。賢治は笑みを浮かべ、用意しておいた由香のスポーツタオルをつかむ。

これで一緒にいけるな。

1、2年と最下位だった由香は、冬、春と徹底的に賢治と走った。その成果で、由香は体力を上げた。おまけに、賢治も。

もう少してゴールだ。賢治はゴール場所まで歩み寄りながら、声援を送った。

「由香あー」

由香と目が合った。

そして、その瞬間だった。

全ての世界がスローモーションになった。世界は、賢治と由香だけになった。

その瞬間、由香の体が、崩れ落ち始めた。由香の表情は豹変して苦悶の表情になった。そして、由香の小さな体が、ゴム状の地面に叩きつけられる。鈍い音が鳴り響き、同時に悲鳴が上がった。賢治は思わず、由香を指して走り出していた。

「由香あー！」

スローモーションの世界が崩れた。

賢治は由香に駆け寄った。その痩せて小さな体を抱きかかえ、名前を呼び続ける。

由香は目を開けたまま、生気のない表情で賢治の顔を見た。そして、最後の力を振り絞ったのだろう。

笑った。

そして、涙を流した。

そして、ゆっくりと目を閉じた。

賢治は由香の体を揺さぶった。何度も何度も名前を呼ぶ。しかし、由香は反応しなかった。賢治はいつのまにか泣き叫んでいた。

一滴の涙が、由香の頬をつたって地面に落ちた。

そしてまた、由香の名を叫んだ。

30代の賢治は足を止めた。真っ暗な暗闇の中で、賢治は黒く艶光りする石を見下ろしていた。さすがに夜の墓地は、気味が悪すぎる。

賢治はいつの間にか、涙を流していた。賢治が見下ろしているのは、由香の墓だ。涙でぼやけて見える。そうだ、丁度この日だったな。由香が死んだのは。

由香は頑張り過ぎて死んでしまった。心停止。自分のせいなのだろうか。自分が、期待をし過ぎてしまったのか。由香はそれで、死んでしまったのだろうか。

「由香……」

賢治は座り込むと、由香の墓に向かってつぶやいた。ごめんよ、花も持ってこないで。

あの時、賢治は由香の両手を必死に握りながら、祈り続けた。最後まで。賢治はあの日、その時から心が止まっていた。由香の姿はいつまでも心の奥底で走り続けている。由香の笑顔、由香の声、全てが自分の心のなかで渦を巻いていた。

賢治は涙を拭くと、たたずんだ。月が悲しみを増進させる。由香を病室の外で待つ夜も、こんな月夜だった。

忘れてはならないんだ。拭い去ろうとしては、ダメなんだ。由香は自分の心の中に、ずっと住み続けるのだ。由香との記憶は、自分の足かせになっっているようで、なってはいない。由香との記憶は、大学入試の時も、入社面接の時も、結婚する時も、自分の背中を押し続けてくれた。

「由香、やっと分かったよ」

賢治はまた、涙を流していた。長い年月を通して、やっと解決された。由香も天国で一安心しているだろう。自分は、由香の分も生きていく。

由香が生き生きとしていたあのトラックのように、人生のトラックを、賢治は必死に走り続けていく。

「賢治」

自分の名を呼ばれて、賢治は振り返った。あこのころの若々しく、純粋な声だ。

そこには、あこのころの由香が立っていた。ジャージ姿で、気の抜けた顔の、いつもの由香だ。賢治の目からは、涙がとめどなく流れ始めた。

「由香……」

若い頃の爽やかな声はでないが、賢治は何回も由香の名を呼ぶ。

あの時を取り戻すかのごとく。

由香は笑みを浮かべると、手を振った。そして、何かを呟いた。

「バイ……バイ……?」

賢治は涙を拭った。

涙を拭った後、そこに由香の姿は無かった。

あの声だ。知らず知らずに背中を聞いていた声が、自分を振り向かせていた。そして、振り向くたびに、自分は切なさを感じる。

あの季節を、賢治は心に留めておこうと、決めた。そして探し続ける。

賢治は空を見ると、走り出した。あのころの自分に、空を通じて、繋がっている気がする。

賢治と由香が走っていた、あの空に。

## 君という名の翼（後書き）

どうだったでしょうか？ぜひ、君という名の翼を聞いてみてください。  
い。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1483/>

---

秒針の詩達

2010年10月20日19時26分発行